

二重母音のダイナミズム：  
中世シャンパーニュ文語の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, 裕司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008908">https://doi.org/10.14945/00008908</a>

## 二重母音のダイナミズム

—中世シャンパーニュ文語の場合—

川口裕司

### 中世の綴り字と音声研究

フランス語は13世紀にどのように発音されていたのか。現代語からの資料（たとえば、方言、音声学的原理、等）は確かにこの問題についていろいろのことを教えてくれる。とはいえ最終的に頼りになるのは、写本上に現れる綴り字と韻文の場合では韻である。写本上の綴り字を調べてみると、綴り字にはある規則性を持って現れる場合とそうでない場合のあることがわかる。綴り字はどうして不規則な現れ方をするのか。写字生がなんらかの不注意で誤写をし、そのために不規則な綴り字が現れたのだ。こういう風に決めつけることはいともた易い。しかしながら「不注意による誤写」というそれ自体を科学的に裏付けることが難しい概念を持ち出して、この現象の説明になんらかの光りを投げかけることができるだろうか。まずはこの点から検討を始めることにしたい。

結果としての誤写には2種類あると言える。本人が気付いている場合と不注意による場合である。前者をどうして問題にしなければならないのか、また誤写と呼ぶのか。そう考える方がおられるかもしれない。およそ本人が気付いているのであれば、訂正等をした筈であり誤写ではないと。ところがこの点に関して中世フランス語の写本には固有の問題がある。13世紀の写本はほとんどが羊皮紙に筆写されている。この素材は一度その上に文字を書き下すと写本を傷つけずに訂正をするのは困難である。「パリンプセスト」(palimpseste 新たなテキストを書くために元のテキストが削られた写本) という術語が存在するのはこのためであろう。これは紙に筆写された写本とは根本的に異なる点である。事実13世紀の終わり頃に筆写されたと考えられる紙写本トゥール市立図書館927番(「アダム劇」の写本)では、誤写に気付いた写字生が文字の上に線を引き、正しい形をそのすぐ上に書き足している<sup>(1)</sup>。羊皮紙写本では写字生が誤りに気付きながらもその訂正を諦めた場合があったかもしれない。従って本人が気付いていても、誤写を必ず訂正したかどうかは分からないのである。とすれば羊皮紙写本では誤写を確かめる手立てはないのか。そんなことはない。

程度の差はあろうが、羊皮紙写本でも不規則な綴り字が誤写によるかどうかを確かめることができる。一般に誤写が生じた場合、正しい綴り字がそれ以外の場所でずっと高い頻度で現れている筈である。一般に両者の頻度は著しく不均衡なのであって、綴り字の頻度を綿密に調べるまでもなく、誤写の方はすぐにそれと分かる。とはいえ問題はそれほど単純ではない。少数の不規則な綴り字をすぐに誤写に帰することができるかというところがそうはいかないからである。たとえば原本がある方言で書かれていて、写字生が別の方言の話し手であったとしよう。写字生は原本の綴り字を尊重しながらも写本の中に自分の方言形をいくつか混入したかもしれない。その場合少数の不規則な綴り字は方言形なのであってもはや誤写ではない。方言形かどうかを立証するには、同じ時期に同じ地域で筆写された別の写本を調べたり、その地域の現代の方言を調べる以外に手が無い。必ずしも確証を得られる例ばかりではないが、少なくとも誤写として放っておくよりは綴り字の不規則性に関して一步踏みこんだ議論ができそうである。

方言の話が出たついでに写本上に現れる方言の問題を少し考えておこう。中世の写本が口頭言語をそのまま写しているなどとは考えられない。文献学者が中世の写本を研究する時、彼らは長年の経験をもとにその研究対象について次のような作業仮説を設定しているようである。「いま一度古仏語における方言の概念を明確にしておこう。現代の研究が一般的に認めるところによれば、様々な地域の古文獻は少しもその地域で話されていた特有の方言を写してはいない。古文獻が写しているのは中央の形と地方の形が入り混じった部分的に人工的な書記言語なのである。こうした地方間の干渉こそが我々に古い方言に関しての情報（ただし部分的）を与えてくれるのだ」<sup>(2)</sup>。ところで多くの研究者がそれぞれ独自の研究を進めてはいるものの、中世フランスの方言分布・方言特徴に関してはいまだに確実なことが言えない。その背景には文語が持つ固有の問題があると思われる。現状の研究レベルでは、テキストに現れる形を中央の形（いわゆる標準形、地域共通形）と方言形に厳密に区別できるのかどうか甚だ疑わしい。

我々は少し発想を転換していくつかの可能性を想定しながら中世の写本を考えてみたいと思う。その場合に大切なことは以下の3点である。まず古文獻は単なる写本ではなく特定の読者に読まれることを目的としていた点があげられる。次に写字生が原本をそのまま写したという保証は何もないこと。最後に文学作品の写本に現れる言語は少なからず美的機能を担っていた点である。

以上の3点を考慮するならば扱う資料体は自ずと限定される。この論文の中で詳細に検討する13世紀の古写本は、上の3点からみて極めて興味深い写本なのである。現在この写本はフランス国立図書館のフランス語写本794番として保存されている。写本には中世シャンパーニュ地方の作家クレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の文学作品が筆写されており、それが写本全体の約3分の1を占めている。綴り字の特徴等からこの写本は13世紀の前半に書かれたものらしい。この写本がユニークなのは写字生の名前が後世に伝わっていることである。クレチアンの作品『獅子を連れた騎士 イヴァン』(Le Chevalier au lion (Yvain) 以下では『イヴァン』と略)のexplicit (巻末の語) (folio 105c) の後でこの写字生は次のように記している。

Cil qui l'escrist Guioz a non; 筆写した者はギオという名前である。  
devant Nostre Dame del Val ノートル・ダム・デュ・ヴァル教会の前に  
est ses ostex tot a estal. 仕事場が常設されている。

ノートル・ダム・デュ・ヴァル教会はかつてプロヴァン (Provins) (パリの南東部で現在はセーズ・エ・マルヌ県) にあった。1336年この教会は崩れその鐘楼 (16世紀の建築) だけが今日まで残っている。この教会の存在は文献によって確かめられる。たとえば13世紀後半の『プロヴァン施療院の年貢徴収簿』(Censier de l'Hôtel-Dieu de Provins) にはNostre Dame du Valという語が記録されている。またマリオ・ロック (Mario Roques) の推測では、ギオなる写字生は筆写を商売にしていたようである<sup>(3)</sup>。この写本を写字生の名前にちなんでギオ (Guiot) の写本と呼ぶことにしたい。ギオの写本にはシャンパーニュ地方で当時使用されていたと考えられる方言形がしばしば現れる。シャンパーニュ・ブリー公はプロヴァンに居城を構えていた時期がある。従って写本にシャンパーニュ方言が現れたとしても驚くには当たらない。

さて先にあげた3点をギオの写本について検討してみよう。事情がよくわかるように具体例をあげよう。ギオの写本にはクレチアンの作品以外にノルマンディー地方で書かれた文学作品も筆写されている。ノルマンディー写本とギオの写本を比較してみると、ノルマンディー写本における *pruz furent, e vus estes pruz* の箇所をギオは *preu furent et vous estes proz* と筆写している。この場合 *preu* はシャンパーニュで使用される語形と考えられる。また脚韻 *proz* は *toz* と韻を踏む。彼はノルマンディーで使用される形をシャンパーニュ

の語形に直し、脚韻の綴り字を統一したのである<sup>(4)</sup>。この書き換えの背後にはシャンパーニュの写字生がノルマンディーの写本を筆写したという事実がある。シャンパーニュの読者に向けてノルマンディーの語形をそのまま筆写するわけにはいかなかったのであろう。与えられた条件が一定である限り、ここでは体系的な綴り字の書き換えが行われ誤写は問題にならない。

次に写本が原典に忠実であったかどうかについて述べよう。厳格な写字生であれば原典の語形を無視する可能性は極めて低いと予想される。ところで先に述べたように写字生ギオは筆写を商売にする者であったと推測される。ボーリュー (Charles Beaulieux) が指摘しているように、フランスで写字生が急増したのは紙が導入された13世紀後半から14世紀あたりらしい。しかもこの時期に教会との関わりを持たない写字生が増えたのである<sup>(5)</sup>。とすればあくまでも推測の域を出ないが、ギオの頃に筆写を商売にする者がいたとしても不思議ではない。このような前提に立てばシャンパーニュの読者に合わせてギオがノルマンディー地方の原本を書き直したことも納得がいく。

最後にギオがクレチアン・ド・トロワの小説を筆写した点に注目しよう。クレチアンは自分の作品『荷車の騎士 ランスロ』(Le Chevalier de la charrete (Lancelot) 以下では『ランスロ』と略)をシャンパーニュ公の奥方マリーに捧げている。クレチアンはシャンパーニュ公の宮廷にいた人々に向けその地方で使用されていた語形を用いて執筆したことが予想される。シャンパーニュ公の居城があったプロヴァンでシャンパーニュ方言が話されていたとしても不思議ではない。つまりクレチアンの原典とギオの写本は、これも推測の域を出はしないが、極めて類似していた筈である。ギオが書き換えをしたとすれば、おそらくそれはクレチアンの原典に記されている古い語形を新しい語形に書き換える場合か、言語の美的機能を配慮した場合である。後者を具体的に説明しておこう。文学作品ではとりわけ使用される言語自体が問題になる。単語の選択が作者と写字生に任せられ、その語の選択自体が重要なのである。たとえばクレチアンが特定の語を頻繁に用いたり、文語的な表現や語を好んで用いたとしよう。その結果その語や表現はいわば自動化し平凡になってしまう。その文脈にあらたな美的機能を付与しようと思った瞬間、写字生ギオは非日常的な言語形式としての方言形(あるいは個人に特有な語形)を使用してその文脈の再生を試みたかもしれない。こうした美的機能が成り立つのは「言語の自動化」という前提が存在するからである。方言形・個人語はいわば非日常的形式であり、言語の自動化に逆行する形式である。自動化の裏返しである現働化は

しばしば言語の美的・感情的機能を担う。この現象は言語学者によってすでに指摘されている<sup>(6)</sup>。

さて中世の写本に現れる綴り字を調べ当時の発音を推定する時には、写本上の綴り字が発音を表していたという作業仮説を設定する必要がある。たとえば *pais* という語形を考えてみよう。母音を *ai* と綴る理由は何なのか。語源と考えられるラテン語の *pax, pacem* を見てもその説明は得られない。この綴り字を説明するためには音声変化の過程を再構する必要がある。ラテン語からフランス語にいたる過程でアクセントのある音節 (*pacem* の *pa-*) はそのまま維持されたのに対して、アクセントより後ろの音節の母音 *e* は脱落した。また子音 *c* はある時期に *i* に変化した。歴史音声学が再構したのはこうした音声変化の過程であった。綴り字はここでは音声変化を活写していたと思われる。さもないければ *ai* という綴り字が現れたことの説明がつかない。長いフランス語史のある時期に *ai* が発音をそのまま表していたのではないとすれば、誰が何の理由で *ai* の綴り字を考え出したというのだ。文献学と歴史音声学の接点はまさにそこにあったのである。歴史音声学と文献学の出会いをお膳立てしたのは文字システム自体である。アルファベット表記では綴り字の変遷をたどれば、音声変化がどのように起きたのかを比較的容易に知ることができる。また弁別の単位と離散的単位をアルファベット表記では容易に抽出できる。具体的に説明しよう。たとえば *pas* <ラテン語 *passum* と先の *pais* を並べると、両者は *a* と *ai* の違いによって弁別されることがわかる。それぞれが弁別の単位なのである。また *p-a-s* と *p-ai-s* は3つの離散的単位から成り立っていることもわかる。以下の論考はこうした作業仮説の上に成り立っていると理解していただきたい。

ギオの写本を例にとったのは音声と綴り字のダイナミズムを説明するためである。この論考では音体系をダイナミックな対象としてとらえ、常にその内部で変化が起きながらも全体として1つの構造を形成していると考ええる。具体的に言うと、綴り字(すなわち音声)が個人のレベルでどのように変異し、揺れ、あるいは逆に固定化し、それが当時の音声変化および音韻変化とどのように関係しているかという点に重点が置かれる。本論文が扱うのは2つの二重母音 *ai* と *oi* である。両者は両極端のタイプに属する。*ai* には極めて不規則な綴り字の変異が見られ、一方 *oi* にはそれが見られない。この2つの二重母音が音声のダイナミズムとどういう風に関係するのか、その点がこの論文の焦点なのである。

綴り字の変異 —ai, ei, eの場合—

クレチアンの作品の脚韻を調べると、すぐ次のことに気付く。同じ単語を筆写する際にギオは ai と ei と e を無差別に用いているのである。『エレックとエニード』(Erec et Enide) 以下では『エレック』と略) から若干の例をあげてみよう。

ai, ei, e の間の変異	( ) 内の数値は出現回数
faire (8) (<facere)	(aire, atraire, doaire, maire, portraire, traire, vaire と韻を踏む)
feire (7)	(apeire, eire, treire, veire と韻を踏む)
ferre (6)	(afere, ere, retrere, trere と韻を踏む)

ai と ei の間の変異

vairre (1) (<varium)	(faire と韻を踏む)
veire (1)	(feire と韻を踏む)

ai と e の間の変異

gaire (1)	(traire と韻を踏む)
guere (1)	(trere と韻を踏む)

ai, ei, e はそれぞれアクセントを持つ母音である。これらは全て語源的に同じ母音、すなわちラテン語あるいはゲルマン語のアクセントを持つ a に由来する。この母音はラテン語からフランス語への変遷の中でそのまま維持される。この母音 a には種々の理由から生じた半母音の i (yod) が後続している。こうして二重母音 ai が生まれたわけであるが、後にこの二重母音は [ai>ei>e] の変化を被った。以上は歴史音声学がすでに説明していることであり異議を唱えるつもりはない。たとえば古典ラテン語の factum は [fait>fɛit>fɛt]、フランク語の waigaro-s は [gairəs>geirəs>gerəs] に変化した。後に議論することだが [ai>ei>e] のように線状の変化として音声変化をとらえることに筆者は少なからず疑問を抱いているが、他に良い記述方法もないため今のところ伝統的記述方法に従うことにする。

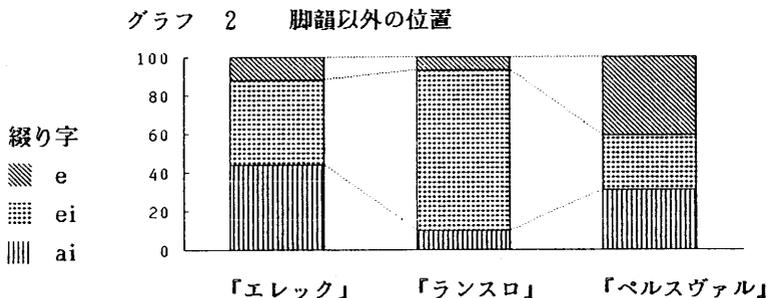
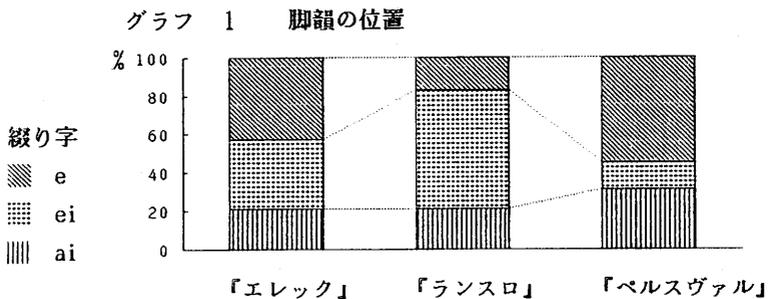
クレチアン・ド・トロワの時代に [ai>ei>ɛ] の変化が始まっていたことは確かである。たとえば次の脚韻が示しているように [ai>ɛ] の変化が起き、そのためにこの母音はラテン語のアクセントを持つ閉音節の母音 *ë* と混同された。lermes : termes (<lacrimas : tēminus) 『ランスロ』 v.4703-04、après : mes (<ad p̄ressum : magis) 『聖杯譚 ペルスヴァル』 (Le Conte du Graal (Perceval) 以下では『ペルスヴァル』と略) v.5029-30。ギオの写本では lermes の語には全く綴り字の変異が見られない。綴り字は常に e であり発音は広い母音 [ɛ] であったと思われる。lermes 以外にも het, hez (<\*hatis), lerne, mestre (<magister), nestre (<nascere), set, sez の語は常に e で綴られる。少なくともギオの写本では、これらの語において音声変化は不可逆的な段階に達していたと考えられる。つまり [ai>ɛ] の音声変化はすでに完了していたのである。しかし大切なことは音声変化の不可逆性ではなく、ギオの共時態の中に現れている動的な現象を正しくとらえることである。すなわち e のみで綴られる単語が一方にあり、他方で ai, ei, e の綴り字の揺れがみられる点である。ある音声変化が全ての語に行き渡っていない、いまだ進行中の状態にある場合にこうした現象が観察される。

進行中の音声変化が問題になりながらも、ある単語について不可逆的な音声変化 [ai>ɛ] が生じているということは、母音 [ɛ] はすでに音素としての地位を獲得していたことを意味する。après : mes (<ad p̄ressum : magis) 『ペルスヴァル』 v.3029-30 は広い [ɛ] の脚韻であり、espes : mes (<spissum : missum) 『ランスロ』 v.633-634 は狭い [ɛ̄] の韻を踏む。従って、mes/mɛs/「しかし」～ mes/mɛs/「料理」のペアは広い/ɛ/と狭い/ɛ̄/により弁別される<sup>(7)</sup>。ギオは両者を厳密に区別している。しかし前者の mes には綴り字の揺れが見られる。音韻対立を証明しようと思えば常に e で綴られる語を例として挙げるのが好ましい。しかしながら進行中の音声変化の場合、一般に音韻対立を証明できるような語のペアを抽出するのは困難である<sup>(8)</sup>。

さて ai, ei, e の綴り字の揺れについて、この揺れが発音の揺れと関係があるというのは確実なことなのか。そのことを議論しておこう。というのは別の考え方をすれば、「ai, ei は音声変化が生じた後も何らかの理由で残った古い綴り字に過ぎず、当時の発音は全て [ɛ] であった」と解釈できないわけではない。しかし綴り字の変異を詳しく分析しないで、当時の発音が [ɛ] であったというのはどうも早急な結論のように思える。たとえば次の脚韻を考えてみよう。eslais : palés 『エレック』 v.4837-38, fere : atraire 『ペルスヴァル』 v.8669

-70。これらの脚韻は明らかに [ɛ] の韻であるが、ギオは ai と綴っている。しかし注目すべきはこのような場合にギオが ei の綴り字を使わなかったことである。上の例からして ai の綴り字がすでに広い母音 [ɛ] を表す場合があったことは間違いない。では綴り字 ei はどうして e の綴り字と共に脚韻に現れないのか。

その原因を調べるためギオの写本における綴り字 ai, ei, e の揺れの方向性を探ってみた。ここでは特に頻度の高い単語を選ぶことにした。その方が綴り字の変化の方向性がよくわかるからである。選んだ単語は faire, feire, fere, /fait, feit, fet /faite, feite, fete /traire, treire, trere である。ここでは語源が問題にならないため、fait 形については直説法現在形と過去分詞形を区別しなかった。結果は以下のグラフのようになる。



綴り字 ei と e の関係は明らかである。ei の頻度が最も高いのは『ランスロ』においてであり、e は『ペルスヴァル』に最も頻繁に現れる。また脚韻の位置でも脚韻以外の位置でも、ei と e の相対的頻度の間には反比例の関係が成り立つ。e の頻度が増せば ei のそれは小さくなる。また綴り字 e が尻上がり増加していることは『エレック』と『ペルスヴァル』の頻度を比較すればすぐわかる。綴り字 ai の頻度は全体を通してほぼ一定である。但し『ランスロ』では ei が増大したため ai は相対的に減少している。

クレチアン・ド・トロワの作品を一般に認められている成立年代順に並べると『エレック』→『ランスロ』→『ペルスヴァル』となる。これと先程の資料を付き合わせると [ai>ei>e] は次のように変化したようである。

『エレック』	『ランスロ』	『ペルスヴァル』
ai	ai	ai
ei	ei 優勢	ei
e	e	e 優勢

上の図によれば『ランスロ』の頃に [ei] が優勢な変異体となり、一方『ペルスヴァル』では [ei>e] の音声変化がますます広がっていく。しかしながらそれ以上に重要なことは、音声変化は [ai>ei>e] のように線状的な変化ではないということだ。変化のどの時点をとっても3つの綴り字 ai, ei, e (=変異体) が共存しているのである。音声変化の真骨頂とはそうした変異体間のダイナミックな関係のことなのである。以上をまとめておこう。ギオの写本では ai はもはや二重母音ではなく広い母音 [e] を表すための綴り字に過ぎないかもしれない。少なくとも若干の脚韻についてはそのことが言える。一方ギオの写本では2つの変異体 [ei] と [e] が共存し、その間に葛藤が観察される。変化の方向性は『ランスロ』と『ペルスヴァル』を比較すれば明らかである。一度は優勢になった [ei] が結局 [e] に取って代わられていく。

音声変化が進行している間は相対する変異体の共存が観察される。変異体のこうした葛藤こそが音声変化の真の姿であると考えればそのプロセスは漸進的である。それに対して、音声変化は単に音が置き代わる現象に過ぎないと見なせばそのプロセスは突発的である。前者は中間過程を重視し、後者は始めと終わりを重視する立場である。両者は単に見方の違いにすぎないように思える。重要なことは変化の中間段階をどのような意味で重視するかである。例えば

我々は [ai>ɛ] という変化の中間段階として [ɛi] を認めるが、中間段階をこれ以上細かく分けることには異論を唱える。ギオの写本を問題にする限りそれ以上の中間段階は関与し得ない。中間段階 [ɛi] の意義はそれが綴り字として現実に現れる点、この音がギオの写本では音声変化のダイナミズムを理解する上での鍵になっている点にある。

さて共時態に変異体の共存・葛藤がみられることは理解できたでしょう。ではどうして相対する変異体の共存が起きるのだろうか。他の時代に起きた同じような現象を参考にして、その疑問に間接的な解釈を施すことができよう。17世紀のパリでは変異体 [uɛ] と [ɛ] が競い合っていた。当時の文法家の意見を総合しながらイヴオン・フォノジ (Ivan Fónagy) はこの現象を次のように説明している。「既に変異体 ue は稀にしか用いられなくなっている。それはある種の厳粛で古風な詩的あるいは修辭的ニュアンスを獲得したのである」<sup>(9)</sup>。こうしたニュアンスを獲得したおかげで [uɛ] は主に上流階級や宮廷の中で保持されたようである。ところでこの変異体の葛藤を単に社会階層の観点だけから分析することは言語研究の立場から見れば片手落ちである。変異体の対立と社会階層の対立が重なり合う背景には、変異体が社会的レッテルを獲得するまでの一連の言語内的プロセスがあった筈である。変異体 [uɛ] と [ɛ] の葛藤についてそのプロセスを簡単に説明してみよう。uɛ は二重母音の ei に由来する。フランスの西部地方ではその ei が ɛ に変化した。一方東部地方では ei は oi に変化し、そこから問題の ue が現れる。その後パリには西部と東部の両方の発音が入り込む。その場合に民衆は [ɛ] の発音を受け入れたようである。そのお膳立てをしたのが上でみた [ai>ɛi>ɛ] の音声変化である。この変化により、どうやら新しい ei (<ai) と古い ei (>oi) の混同が生じたようである。上流階級はこれに対し oi (>uɛ) を受け入れることになる。こうして e の発音は民衆の発音であると同時に西部訛りであると考えられた。パリの上流階級が ɛ を嫌った背景にはこうした方言や社会階層に対する言語意識があったようである。このようなプロセスを明らかにすることこそ言語研究の務めなのだ。とはいえ13世紀の言語について同様の研究を押し進めることは資料的な制約もあり極めて困難である。しかしながら変異体の共存を説明する際に、ai, ei, e の間にこうした社会的・文体的差異を想定することは無意味だとは思わない。

#### 綴り字 oi について

脚韻を分析してみるとクレチアンは2つの oi を厳密に区別していることが

わかる。片方の oi では o は広い母音である。もう一方の o は狭い。例をあげよう。soie : voie (< sēta : vīa) 『ペルスヴァル』 v. 4395-96 では母音 o は広い。これに対して voiz : doiz (< vōces : dūce-s) 『ランスロ』 v. 5129-30 では狭い。両者は同じ脚韻の中に現れない。ここで扱うのは前者の広い [ɔ] を持つ二重母音である。

[ɔi] の語源は 2 つ考えられる。1 つはラテン語のアクセントを持つ開音節の母音 ē と ī であり、もう 1 つはラテン語の au に様々な要因により生じた yod が続いた場合である。poise : noise (< pē(n) sat : nausea) 『エレック』 v. 4395-96, voie : oie (< vīa : audiat) 『ランスロ』 v. 2963-64。

ところで中世フランス語にはもうひとつ oi で綴られる音があった。たとえば古典ラテン語の *audītum* が変化した *oi* という単語である。写本では分音符は付けられていない。上の oi と区別をつけるために写本の校訂者が *oi* と綴っただけである。両者の対立を証明する最小ペア *oi* : *oi* (< *audio* : *audītum*) もみつかる。この最小ペアは現代フランス語の *paye* と *pays* の対立と同じメカニズムを持っていたのではないだろうか。音韻論の立場から分析すると、oi の二番目の母音 i は音素 / i / の変異体で、それはアクセントのない位置に現れる。これに対して *oi* の二番目の母音 i はアクセントのある位置に現れる。結局両者は同じ母音音素 / i / の 2 つの変異体に過ぎない。どうして前者を硬口蓋子音 / j / と解釈できないのか。その理由はこうである。13 世紀のフランス語において他の口蓋化子音 [l'] と [n'] はそれぞれ音素 / l / と / n / の結合変異体と解釈できる。それぞれ語末の母音 i の後に現れるからである。つまり子音体系の中に硬口蓋音の対立はなく、それを音素として設定する理由は何もない。同様に子音音素 / j / を設定する理由はなくなり、oi の二番目の母音 i を / j / と解釈する必然性はなくなる。

最小ペア *oi* : *oi* の場合に注目すべきことは、この対立のメカニズムが母音自身の弁別特徴に基づいていない点である。対立のメカニズムを説明してくれるのはアクセント位置の違いだからである。前者 *oi* は第 1 音節にアクセントがあり、後者では第 2 音節にある。ピカルディー方言ではアクセントを持たない母音 i が脱落し、oi は o に変化している<sup>(10)</sup>。このことから *oi* のアクセントは第 1 音節にあったことがわかる。ところが後に見るようにギオの写本ではアクセント移動の例が観察される。アクセント移動とは同じ語を問題にしなが、アクセントがある母音から別の母音に移動する現象を言う。とすればアクセント配置は上の対立を説明するには必ずしも有効ではないようである。



れない<sup>(11)</sup>。

ところで上に提示した oi の音韻解釈は言語変化のダイナミズムを考慮していない。ダイナミックな観点からいま一度 oi を解釈してみよう。そうすると oi の音韻解釈はそれほど簡単にはいかないことがわかる。ニコライ・S・トゥルベツコイは『音韻論の原理』の中で、ヨーゼフ・ヴァヘクの二重母音に関する論考を議論しながら「動きの二重母音」に言及している<sup>(12)</sup>。この術語が適当であるかどうかは別として、二重母音の持つ複雑でダイナミックな調音を示唆している点は興味深い。すでにみた変異体 ai, ei, e 間の葛藤もダイナミックな現象であった。oi にも同じような現象がみられるのである。ただし oi の場合に綴り字の揺れは極めて稀である。この点は ai, ei, e と正反対である。しかし忘れてはならないのは、綴り字は音声特徴の一部分しか表していないということだ。とりわけ韻律的要素（アクセント、長さ、スピード、メロディー）は綴り字には全く現れていないのである。

次の脚韻を考えてみよう。artuel : soloil『イヴァン』v.2997-98（<artículum : solīcūlum）。ここでは綴り字 ue が oi と韻を踏んでいる。-oil 形はクレチアンの他の作品に現れる。ortoil : mervoil『ペルスヴァル』v.8761-62、artoil『エレック』v.1147。硬口蓋子音 l の前で二重母音 [qi] は [uɕ] に変化していたようである。クレチアンより少し後に書かれたプロヴァン市の古文書（13世紀後半）では、この音声変化は他の位置にまで広がっている。具体例をあげよう。doet（<dēbet）、hoer, hoers（<hēres）、paroe（<parētem）、voe（<vīa）、等<sup>(13)</sup>。音声変化 [qi>uɕ] は中世フランス語で起きたとされる、いわゆる「アクセントのシーソー現象」と関係がある。oi は下降二重母音でありアクセントは最初の母音 o にある。ところがその後アクセントは o から i に移動して二重母音 ue に変化した。このアクセント移動は oi, oe, e の変異体が確認されることからわかる。たとえば doit, doet, det をあげて説明しよう。doet でアクセントが o から e に移動した結果、アクセントを持たなくなった o が脱落する。こうして det 形が現れたのであろう。ギオの写本でもこうしたアクセント移動が起きていたのではないかと思われる。この仮説は単なる言葉だけにとどまらない。それどころか脚韻を分析するとアクセント移動が体系的に起きていることがわかるのである。

たとえば ie はかつて下降二重母音であった。アクセントは母音 i の上にあった。後にアクセントは2番目の母音の上に移動したようである。次の脚韻

がその例である。liē : lié (<ligātum : laetum)『クリジュス』v.2783-84、desliee : corgiee (<\*desligāta : \*corrigāta)『ランスロ』v.2783-84。また下降二重母音 ui でも同じくアクセント移動が生じている。lenguis : apris (<\*languio-s)『イヴァン』v.3571-72。こうしたアクセント移動は脚韻によってしか確かめられない。綴り字自体はアクセント移動には無関心である。

中世シャンパーニュ方言でアクセント移動がいつ起きたのか、正確にその年代推定をするのは極めて難しい。二重母音はそれ自体複雑な調音である。アクセント移動はそうした二重母音のダイナミックな調音のもつ1つの宿命なのではないだろうか。現代フランス語でもアクセント移動の例が報告されている。ジョルジュ・ストラカによれば、強調アクセントの影響でアクセントが2番目の母音に移動し *çi, wa* はパリの民衆発音において *ü-i, u-a* となる<sup>14)</sup>。

近年の音響音声学の成果を利用すれば、二重母音のアクセント移動に関してさらに一步踏み込んだ議論を展開することができるかもしれない。英語の二重母音研究から重要な仮説がたてられている。それによれば二重母音には少なくとも2つのタイプが考えられるという。レヒステとピーターソンは英語の単母音と二重母音の持続時間を調べた。音声環境はいずれも子音+母音+子音である。子音から母音への入り渡り (onglide) と母音から子音への出渡り (offglide) の中間に位置する時間を彼らは「母音のターゲット」と定義する。実験の結果、ある二重母音では持続時間が比較的短く、ゆっくり変化がおきており、安定したスペクトル分布領域は1つしか見られないことがわかった。これに対して別の二重母音では持続時間が長く、安定したスペクトル分布領域が2つあり、両者の間の移行部分もかなりはっきりしていることを発見した。前者は1つのターゲットからなり二重母音として分類するには適さない。二重母音とは後者のように2つのターゲットからなる母音連続であると彼らは考えた。この報告の中で注目すべきは、後者の場合に2つのターゲット間の移行部分の持続時間が前後に来るターゲット自身よりも長い点である<sup>15)</sup>。この結果を考慮して二重母音を定義するならば、二重母音とは、「両端に位置してそれ自体の持続時間が短く安定した2つのターゲット母音間の動きあるいは方向性」のことである。トゥルベツコイが論じた「動き」とは2つのターゲットに挟まれた持続時間の長い移行部に由来する概念なのではないか。またこの移行部がアクセント移動と関係があるように思える。ところで英語の二重母音に関する音響音声学の原理を無批判にフランス語の歴史的音声変化にあてはめてしまうのは危険

である。その原理を適用するためには両言語の構造的相違が考慮されると同時に、両言語の間に平行した現象が見られなければならない。今とりわけ問題なのはアクセントの性質である。アクセントの音響構造は言語ごとに異なり、アクセントは各言語の慣習 (convention de chaque langue) の中に組みこまれているとも考えられる<sup>(16)</sup>。従って中世フランス語のアクセント移動を上述の音響学原理と関係づけるのは慎重を期さなければならないであろう。ここでは両者の関連を仮説として述べるにとどめる。仮説の検証は今後の研究課題となる。

〔*qi > ue*〕の変化が他のアクセント移動と同時に起きている点を見過してはならない。なかでも興味深いのは二重母音 *oi*, *ie*, *üi* の共通点である。中世フランス語にはこれら3つの二重母音にそれぞれ対応する2音節の母音連続が存在している。*oi* に対しては /*o* / + /*i* /, *ie* には /*i* / + /*e* /, *üi* には /*ü* / + /*i* / がある。こうした母音連続の存在はアクセント移動が起きるための条件であると考えられる。それが証拠に、対応する母音連続が存在しない二重母音 *ou*, *au*, *ue*, *eu* ではアクセント移動が起きていないのである。これらの二重母音はその後単母音に変化したのである。*ou* は *u* に、*au* は *o* に、*ue* と *eu* は *ö* にそれぞれ変化した。

このように中世フランス語には2種類の二重母音があったように思える。1つはアクセント移動の起きた二重母音であり、もう1つは単母音化した二重母音である。現代アメリカ英語の方言でも同じ様な二重母音の単母音化が起きている。サウス・キャロライナ州とジョージア州では *tale*, *tail*, *stone*, *grown* はいずれも単母音で発音される<sup>(17)</sup>。これらの二重母音はいずれもレヒステとピーターソンの言う1ターゲットしか持たない二重母音にあたる。

中世フランス語でアクセント移動の起きた二重母音とは2ターゲットを持つ二重母音ではなかったのか。その場合に二重母音のそれぞれに対応する2音節の母音連続が存在する。これに対して、単母音化した二重母音はおそらくターゲットを1つしか持たなかった二重母音であろう。またターゲット間の持続時間の長さがアクセントの揺れを生み出していると考えられる。アクセントを知覚する時、その音節で基本周波数の上昇や変化が起きたり、強さと長さが増加することがこれまでの研究で明らかにされている<sup>(18)</sup>。基本周波数・強さ・長さは一般にアクセント知覚にとって分解できない一つの単位を構成するようである。ターゲット間の移行部でそれらの韻律要素に変化が生じれば、アクセントは前後のいずれかに移動したように知覚されるのではないか。ところがフランス語では3つの韻律要素が独立して機能することがあり、結果としてアクセン

ト知覚が曖昧になる。2音節の単語に関してフォノジがこうした例を報告している<sup>(19)</sup>。中世フランス語に同じようなアクセントの曖昧性がみられたのかどうか、あくまで推測の域を出ないが、少なくとも二重母音のアクセント移動については紛れもない文献的証拠がある。

さてアクセント移動が起きた *oi, ie, iï* と起きなかった *ou, au, ue, eu* をくらべると、*i* を含む二重母音でアクセント移動が起きているのに対し、*u* の場合には起きていないことがわかる。クレチアンの時代では */u/* は新たに導入された音素であり、いまだ確固たる音素の地位を獲得していない状態であった。狭い母音 */ø/* と二重母音 */ou/* の両方が *[u]* に変化しつつあったのである<sup>(20)</sup>。これは *u* を含む二重母音 *ou, au, ue, eu* が2ターゲットを持ち得なかったことと関係がある。*[qi > uɛ]* の中間段階として *[oe]* を想定することは間違っていない。確かに *oe* の綴り字がみられる（すでに引用した *doet, hoer, paroe* を参照）。その後 *[ø > u]* の変化が生じた背景には上に述べた *[u]* 音の登場があったのである。*[u]* が音韻体系に導入された後に *[uɛ]* は二重母音となり、この二重母音は今日でも *[wa]* の発音で残っている。

最後になったが、上の二重母音の変化と最初に述べた *[ai > ei > e]* の関係について述べておこう。*ai* には2音節の音連続 */a + i/* がある。（例 *ai*）。しかしアクセント移動を起こした例はなく、クレチアンの頃には *[ei]* に変化し、さらにすでに見たように *[ei > e]* に変化しつつあった。*i* を含む二重母音でありながらアクセント移動を起こさなかったのはこの二重母音だけである。それは何故なのか。現状では原因はよくわかっていない。1つ言えることは、この音声変化は音韻対立 */ø / ~ / e /* の維持に大きく貢献しているということだ。「音韻対立の維持という目的のためにこの音声変化が生じた」とは言えないのだろうか。もし仮に目的論的考え方（「~の目的のために」）を個別言語の内的要因（「音韻対立の維持」）のみに限定し、一般的な音声学的原理（「アクセント移動が起きる」）は必ずしも絶対的な規則ではないと考えることが正しいとすれば、この音声変化はその目的を達成したということができよう。しかしこうした構造的・合目的的説明で満足してよいのかどうか、筆者はさらに議論が煮詰まっていくことを期待している。

## 結論

綴り字 *ai, ei, e* の変異は進行中の音声変化を表す典型的な例である。幾つかの単語ではこの音声変化が不可逆的な段階に達している。一方それ以外の単語

では変異体の中の葛藤がみられる。こうした変異体の中から話し手はどれを選択するのか。その選択は単なる写字生の不注意・誤字・気まぐれではなく、おそらく変異体のもつ社会的・文体的性格が写字生の言語意識の中にあっただけではないかと思われる。その意識は音声変化の方向性の中に明白に現れている。ギオの写本のうち『ランスロ』と『ペルスヴァル』を観察すると ei と e の競合と後者が優勢になってゆく過程が明らかになる。

ギオの写本では綴り字 oi が驚くべき規則性をもって現れる。しかしこれは驚くに当たらない。アントニ・デースは膨大な数の13世紀の写本に現れる綴り字を調べているが、彼によればフランス東部では一般に綴り字 oi が優勢なのである<sup>(2)</sup>。たった一例の不規則な綴り字 artuel によってアクセント移動の可能性が問題となり、その結果ギオの写本ではアクセント移動が体系的に起きていることがわかった。「綴り字の規則性は必ずしも音声の規則性を反映していない」というのは、文献学的研究を押し進める上での重要な教訓である。綴り字には韻律的特徴が現れない。アクセント移動は脚韻によって初めて明らかになるのだ。体系的なアクセント移動は oi, ie, üi に起きている。それに対して、他の二重母音 ou, au, ue, eu ではアクセント移動が起きず、それぞれ単母音となった。前者には2音節の母音連続 ( / o / + / i / , / i / + / e / , / ü / + / i / ) がそれぞれ対応する。後者には対応しない。これが両者の相違点である。最後に現代英語の二重母音研究の成果をもとにして、アクセント移動の起きる二重母音と起きない二重母音の音響学的な違いを推定した。アクセント移動というダイナミックな現象が起きること自体、二重母音の複雑な調音がもつ宿命であるように思える。

#### 註

\*この論文はパリの国立高等研究院(第4セクション)の機能言語学セミナーで1988年1月6日に筆者が行った口頭発表をもとにして執筆された。セミナーを担当されていたHenriette Walter教授、セミナーの主任であったAndré Martinet教授からは貴重なご意見をいただいた。またIvan Fónagy教授とJacques Chaurand教授からも個人的に助言をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

(1)『アダム劇』の写本を校訂する際にAebischerは写字生が訂正した箇所を註の形で記している。Paul Aebischer, *le Mystère d'Adam*, Nouveau tirage, 1964, Droz.

(2) H. van den Bussche, "L'ouverture de la voyelle (e) issue de (e) roman entravé

- (E, I latins) en ancien français, Essai de datation et de localisation”, in *Folia Linguistica Historica* V/1, 1984, p.52.
- (3) ギオの写本に関してはマリオ・ロックによる詳細な報告がある。Mario Roques, “Le manuscrit fr. 794 de la B. N. et le scribe Guiot”, in *Romania* LXXIII, 1952, pp.177-199.
- (4) ギオによるノルマンディー写本の筆写に関しては次の重要な論文がある。B. Woledge, “Un scribe champenois devant un texte normand Guiot copiste de Wace”, in *Mélanges de langue et littérature du Moyen Age et de la Renaissance offerts à Jean Frappier*, tome II, pp.1139-54, 1970.
- (5) Charles Beaulieux, *Histoire de l'orthographe française*, tome premier, Paris, Honoré Champion, 1967, pp.105-106.以下の書も参照。Jacques Stiennon, *Paléographie du Moyen Age*, Armand Colin, 1973, p.157.
- (6) こうした言語の美的機能の考え方に関して筆者はブラグ学派の理論に負うところが大きい。とりわけ以下の論文集を参照。 *A Prague School Reader on Esthetics, Literary Structure, and Style*, selected and translated from the original Czech by Paul L. Garvin, Georgetown University Press, 1964.
- (7) [ɛ̃] は長母音であったかもしれない。しかし脚韻を調べた限りでは母音の長短を区別していた痕跡は何もない。写本の言語では母音の長短は非弁別の特徴だったのである。一方アングロ・ノルマン方言では ai は長い [ɛ̃] に変化している。『中世英語文法概説』K. Brunner, 研究社、厨川訳、p.38, 『英語学大系 第9巻 英語史Ⅱ』、大修館、中尾俊夫著、p.56.
- (8) 筆者はギオの写本に関して2つの進行中の音声変化 [ou>u] と [o>u] を調べ、その音韻解釈を試みたことがある。その際にも最小ペアを見つけることは極めて困難であった。Yuji Kawaguchi, “Systèmes distincts, fluctuations ou variantes graphiques en ancien champenois”, in *La Linguistique* XXIII/2, Paris, 1987, pp.87-98.
- (9) Ivan Fónagy, “Über den Verlauf des Lautwandels”, in *Acta Linguistica Hungaricae* VI, 1956, p.253.
- (10) 以下の文献を参照。W. Meyer-Lübke, *Historische Grammatik der Französischen Sprache*, Halle, 1908. p.80. Charles Th. Gossen, “L'interprétation des graphèmes et la phonétique historique de la langue française”, in *Travaux de linguistique et de littérature* VI/7, 1968, p.161.
- (11) 今世紀初頭に編まれたフランス語の発音辞典にも ebahi (=ébahi (e)) の記述が見られる。cf. *Dictionnaire phonétique de la langue française*, H. Michaelis et P. Passy, Hannover, 1927, p.74.

- (12) N. S. Troubetzkoy, *Principes de phonologie*, traduit par J. Cantineau, nouveau tirage corrigé par L. J. Prieto, Paris, Klincksieck, 1976, pp.58-59.
- (13) M. -Th. Morlet et M. Mulon, "Le Censier de l'Hôtel-Dieu de Provins", in *Bibliothèque de l'école des chartes* CXXXIV, 1976, pp.5-84.
- (14) Georges Straka, "La prononciation parisienne, Ses divers aspects (Introduction à l'étude de la prononciation du français moderne) ", in *Bulletin de la Faculté de l'Université de Strasbourg*, XXX, 1952, pp.219.
- (15) Peterson, G. E. & Lehiste, I., "Transitions, Glides, and Diphthongs", *The Journal of the Acoustical Society of America*, Vol. 33, 1961, pp.275-276.次の本にはこの研究の簡単な紹介がある。『ことばの科学入門』廣瀬 肇訳、メディカル・リサーチ・センター、1984 (原題 Gloria J. Borden & Katherine S. Harris, *Speech Science Primer*, 2nd Edition, Williams & Wilkins, Baltimore/London.)
- (16) Ivan Fónagy, "L'accent français : accent probabilitaire (dynamique d'un changement prosodique) ", in *L'accent en français contemporain*, Ivan Fónagy et Pierre R. Léon, Didier, 1978, pp.129-130. 「言語の慣習」に属するとはいえ、アクセントは音素とは根本的に異なる機能をもつ。この点に関しては次の書を参照されたい。Paul Garde, *L'accent*, Paris, P.U.F., 1968、特に pp.8-9と p.11.
- (17) Hans Kurath, "British Sources of Selected Features of American Pronunciation: Problems and Methods", reprinted in *Readings in American Dialectology*, edited by Harold B. Allen & Gary N. Underwood, Appleton/Century/Crofts, 1971, p.267-268. この単母音化は中英語の長母音と二重母音が混同されたことから生じた。
- (18) D. Robert Ladd & Anne Cutler, "Introduction. Models and Measurements in the Study of Prosody" in *Prosody : Models and Measurements*, Edited by A. Cutler & D. R. Ladd, 1983, p.4.
- (19) Ivan Fónagy, *op. cit.*, 1978, pp.133-134.
- (20) 註(8)に掲げた拙稿を参照されたい。
- (21) 13世紀にはパリ地方でも綴り字 oi が優勢である。たとえば mei~moi と sei~soi の分布を示した地図6を参照されたい。Anthonij Dees, *Atlas des formes et des constructions des chartes françaises du 13e siècle*, Max Niemeyer, 1980, p.6.